

## 李泰俊作品論 : 長篇作品を中心として

三枝, 壽勝

<https://doi.org/10.15017/2231022>

---

出版情報 : 史淵. 117, pp.33-61, 1980-03-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 李泰俊作品論

——長篇作品を中心として——

三 枝 壽 勝

一九三〇年代を中心にして作品活動を行った李泰俊は、朝鮮の近代文学における中心的な作家の一人である。従来李泰俊の作品は短篇に偏って論じられる傾向があったが、彼の作品の全体像は長篇も合わせて明らかにするはずのものである。本稿では従来等閑視されてきた李泰俊の長篇作品に焦点をあてることによって得られる彼の作品の特質を考察することにする。

## 一

まず李泰俊の作品成立の前提となる彼の経歴をみておく。

尙虚 李泰俊は一九〇四年十一月七日江原道の鉄原に生れた。父は李文教、母は安氏。本籍は江原道鉄原郡畝長面真面里。父李文教は徳原郡元山に八支配者として赴任してきていたが、日韓併合の前年一九〇九年一家をあげて故国を背にロシア領ウラジオストックに亡命する。この時のことを李泰俊は後に、八父は朝鮮を愛していたため、この地を棄てざるをえない運命から露国商船に私達をのせ永遠に朝鮮を後にして元山港を出たと記している。いくばくもなく病身の父は北国のこの地で客死。一家の支柱を失ない、母は残った子供を引き連れ豆満江を渡り、朝鮮北辺の地梨津にある素清に身を寄せるが、この母も一九一二年にこの地素清で死亡。この時李泰俊は九才、姉は十二才、妹

はわずか三才であった(年令は全て数え年。以下同じ)。

孤児となった三人は故郷の親戚に引きとられるが、親のない李泰俊にとって故郷は決して安らぎを与えてくれる場所ではなかったようである。大人達の同情に対して、大きなはずかしめを感じていた少年李泰俊はまた相当に反抗的でもあったようである。<sup>(9)</sup>一九一五年には、いったん安峽の山奥に移されるが、再び鉄原に戻り、私立鳳鳴学校に通う。<sup>(10)</sup>一九一八年三月、十五才で卒業するが、卒業証書も賞状も見せるべき相手を持たぬ自分の境遇を考え、初めて自分にはなぜ母がおらぬのかと泣いたという。<sup>(11)</sup>上級学校に入る機会を与えられぬ彼は、自己の世界を自分で切り開こうと決心し、一人故郷を後にする。<sup>(12)</sup>

十五才で放浪に出た彼はこの年の夏、上海に渡る目的で鴨緑江を越え中国の安東県に達するが、志をはたせず再び朝鮮に入り白馬・南市・宣川・定州・五山・嶺美・安川・蕭川・順川とさまよい歩く。<sup>(13)</sup>その後元山に現われここで商人相手の宿の使い走りとして足かけ三年を過す。ここで主人に気に入られた彼は婿にむかえられようとするが、主人の娘にも商業にも興味のなかった彼は、主人が旅に出たすきに逃げだすようにしてとび出す。<sup>(14)</sup>

一九二〇年四月、京城に上京、徽文高等普通学校に入学。<sup>(15)</sup>苦学の彼は常に月謝滞納者の汚名をまぬがれえなかったが、一九二三年五月、八なまいきなやつだ、と学校を追いだされる。<sup>(16)</sup>以後の動向は不明であるが、おそらくこの頃海を越えて東京に渡ったと思われる。東京で書いた処女作「五夢女」が『朝鮮文壇』の一九二五年七月号に入選するが、なぜか理由は不明であるが、この作品は同誌には掲載されず、『現代日報』に発表される。<sup>(17)</sup>一九二六年四月、上智大学予科に入学。<sup>(18)</sup>新聞配達をしながら支えていた当時の彼の生活は相当な窮乏状態であったらしい。金志遠および夭逝した作家羅彬(羅福香)と共に早稲田大学の友愛学舎を宿所として、空気を食べて過すような生活をしてきたと後に回想している。<sup>(19)</sup>結局上智大学も長つづきはせず、翌年一九二七年十一月には中途退学をしている。<sup>(20)</sup>おそらくこの直前に病床で書かれたと思われる日記には次のような件りがみえ、当時の彼の心境の一端をうかがわせてくれ

る。

「喉が渇く。だが水を乞うべき人もない。いまさらながら孤独が哀しくなる。力にあまる学校を無理やり続けて何になるか？ 本を読めば？ 小説を読めば？ 知識は果して孤独な私に一本の杖や一匹の犬以上に善良な家族になってくれるだろうか。」

準備！ ひたすら準備……ああ！ 幸福よ？ おまえはそんなにも遠くにいるのか？<sup>(24)</sup>

その後彼が再び勉学を志したかどうかはよく分らない。もしかすると彼が後に「不滅の喊声」や「思想の月夜」などの作品に書いたようにアメリカ留学を試みたのかも知れぬが、いずれにせよ一九二八年にはソウルに戻り、開闢社、中央日報社（現代日報社の後身、後に朝鮮中央日報社となる）、新生社など雑誌社、新聞社の記者を歴任、かつ京城保育学校の講師も勤める。一九三二年には梨花専門学校の講師に就任。<sup>(25)</sup>この間、一九三〇年には梨花専門学校音楽科出身の李順玉と結婚<sup>(27)</sup>、長女小明、長男有白をもうける。<sup>(28)</sup>

こうして幼少期からの彼の放浪生活にはひとまず終止符がうたれる。一九二九年に作品活動を始め、一九三一年には最初の長篇「久遠の女像」を世に問うなど以後多忙な生活の中で一貫した創作活動を続け作家としての地位を確立してゆく。

この当時の李泰俊という人物については、詩人金起林が作品評と合わせて、作品からは「相当に生意気だ」が「老熟している」という印象を受けたが、本人に会ってみるとやはり「作品中から受ける印象とほぼ同じ」で「氏の年は予期していたのより大変若かったがやはり彼は老熟した中年の印象を与えた」と記している。<sup>(29)</sup>この印象記は李泰俊の世間にたいする処し方を大変示唆的に表わしていると思われる。さらに世俗的な目からみられた李泰俊像には次のようなものがある。

「氏こそは果然「久遠の女像」でなければならぬ。ほっそりとした顔つき——ふたえまぶたの目——大きくも小さ

くもない口——そして澄んだひとみに沈着な表情と温情的語調。あたかも子守歌を歌う若き母のようだ<sup>(30)</sup>  
ここにみられるのは、苦難にみちた半生の後、いまや人生を達観し、穏やかな心境に達してしまった人間の姿である。この人物評は、後に一般的なとなった哀愁の美学の作家李泰俊という通説に通じるものを持っている。

すなわち短篇における<sup>(32)</sup>一種の朝鮮的哀愁<sup>(31)</sup>の美学の作家李泰俊という通説に通じるものを持っている。作家としての李泰俊である。しかしいくら彼の人物像や、いくつかの作品から<sup>(33)</sup>淡さ<sup>(33)</sup>を感じとることができたとしても、その背後にある作家自身までが同じように淡淡とした心境に達し得ていたと断定するわけにはゆかぬだろう。彼の短篇を一読すれば直ちに感じとれる対象との距離感——対象から身を引き、決してそこにのめりこんでは行かぬ作者の姿勢——それはこの作家によって意図的にとられた手法であるはずであり、李泰俊自身の幼少期の体験から体得された自己保身の策と密接な関係を有するのではないかと思われる。さらに彼の短篇の素材とされているものを検討すれば、彼の幼少期の体験が作品に濃い影を落としていることは容易にみてとれるだろう。すなわち彼の作品に採用された素材が単に過去の思い出としてとり入れられているばかりでなく、この作家の採用した創作方法そのものが自身の孤児体験よりくる精神的傷痕の表現であり、さらには彼の作家的地位を確得する試みの原動力となっていたということである。

一般に朝鮮における植民地時代、すなわち亡国の<sup>(34)</sup>時代自体が精神的文脈から見ると、父喪失状態、すなわち孤児意識におかれていたという指摘がすでになされているが、この指摘を合わせ考えるならば、李泰俊は朝鮮人作家ならば誰もが味わわねばならなかった時代の孤児意識と、彼自身の個人的な孤児意識とを二重に背負わされた作家であったといえる。<sup>(35)</sup>この点についていえば、単に李泰俊のみならず、朝鮮の代表的な作家李光洙についても全く同様である。したがって問題は李泰俊という独自の作家が、彼自身に特有の体験よりくる精神的傷痕をいかにして克服せんとしたか、あるいはどこまで克服しえたかという点にしばられてくる。

この点の考察に關していえば、推敲を重ねた文章の背後にややもすれば自己を韜晦しがちな短篇よりも長篇の方がより適しているのではないかと思われる。

二

李泰俊が植民地時代に発表した長篇の数は決して少くない<sup>(36)</sup>にもかかわらず彼の長篇が論じられることはほとんどなかった。理由は簡単である。A 駄作Vとみなされているからである<sup>(37)</sup>。A 女学生小説Vという言葉が何よりもこの評価をよく表わしている<sup>(38)</sup>。しかしながら、彼の作品をA 駄作Vと断言する同じ標準を全ての朝鮮の近代文学に適用した場合、どれほどの作品が残りのだろうか。この間に確答を与えるにたる研究は未だなされてはいないのであるかと思われる。さしあたっては個々の作品に即して検討を重ねる他はなさそうである。

李泰俊によれば小説とは人生を描きだすものである。人生を一つの多角形にたとえるとすれば、多角形全体は長篇により、一辺は短篇で、頂点は掌篇により描きだされるという<sup>(39)</sup>。彼自身は、作品の出来具合がA 善かれ悪かれ書いてしまつてから何かを作り上げたという創造の喜びを持つVことができたのは、A 人生を描写するの<sup>(40)</sup>に一種の経済的手段として発生した形式Vである短篇においてであったと語っている。長篇作品についていえば、自作に対する愛着は語つても作品に対する満足感を表明したことは一度もないようである<sup>(42)</sup>。

満足な長篇の書けぬ理由の一つは新聞連載という推敲の余地のない発表形式であり、他は書かれるべき当時の現状の問題であった。後者はA 朝鮮のように空間的にも時間的にも大局的に取扱おうとすれば種々難点に逢着する環境V A あまりにも平面的なV生活の現状と表現されている<sup>(43)</sup>。漠然とはしているが、植民地下においてなまじ身を躍らせれば一身の破滅か対日協力の虜となりかねぬ危険性への慮りと、内心の理想とのはざまより発せられた言葉ともこれ。いずれにせよ彼自身には長篇への野心があり、ただ外的条件から思うように書けぬのだと考えていたことを察す

ることができる。

彼の言う人生の全体像がいかなるものだったのか、以下植民地時代に発表された十三篇の作品を紹介しながらみてゆくことにする。<sup>(44)</sup>

「久遠の女像」…西洋人の篤志で女学校専門科に通う孤児の李仁愛は早稲田に学ぶ孫英朝と以前から愛しあう間であつた。<sup>(45)</sup> 社会運動にかかわっていた孫英朝はある時、一時帰国しソウルにやって来、李仁愛は同室の寄宿生明桃と共に会いにゆく。ところがかねて仁愛の消極性に不満を抱いていた英朝は、活発な明桃に心を魅かれ彼女と関係してしまふ。虚弱でおとなしい仁愛はそれを知り悩むが、結局英朝をひそかに愛しつづけることで満足する。後、英朝が西大門刑務所に収監されると仁愛は結核の体をおして差入れを続けるが、英朝は終に脱獄。家宅捜査の衝撃で仁愛は啞血し、かつて英朝から送られた指輪をはめたまま帰らぬ人となる。

「法はそうだが」…元山のみえる島に育つた金瑞雲と金慶南は許婚であつた。ある日瑞雲は島の外に對する憧れと無知から島めぐりの業者によってさらわれる。海を泳ぎ渡つた慶男は瑞雲を助け出し、元山で乞食同様の生活を共にするが、瑞雲は再び見知らぬ画家に付いてソウルへ、さらに阿片密売者李根喆と同棲生活。慶男が再び捜し求める彼女にめぐり会つた時には、瑞雲は放火罪で服役後バスの車掌をしていた。共に暮せるようになったのもつかの間、瑞雲は自分を連れ戻そうとした李根喆とのいざこざから根喆を殺してしまう。法廷で十年の刑が言い渡された時、傍聴席の慶男は「法ではそうだろうが、原因は自分の誤解もある。彼女の罪を別ち負わせてくれ」と述べる。

「第二の運命」…沈天淑と、その家に引きとられて暮す孤児の尹弼宰とは少年時代を兄妹のようにして過すうち、互いに将来を約す仲になっていった。ところが尹弼宰の友人朴順九は沈天淑に野心をいだき、弼宰の友人でもある康壽煥の助けを借り策を弄した結果、弼宰・天淑間に誤解が生じたこともあつて天淑は朴順九のもとに嫁いでしまふ。悶々とした心情に加えて就職難の中、弼宰はやつと教師の職を得るが、これも康壽煥の企みで追われる。弼宰は学校

で新たに知った南マリアを伴侶として廢校の危機に陥っていた鉄原龍潭の関東義塾再建の仕事に情熱をもちやす。しかし財政難により金策に奔走した結果、金マリアは警察に捕えられ死亡、関東義塾は普通学校許可を取消される。失意の弼宰は塾の再建を残った青年と結婚生活に敗れてやってきた天淑に任せ、自分は将来を求めて一人龍潭を去る。

「不滅の喊声」…田舎に母を残して苦学する朴斗栄は下宿の姉娘で仁川で教師を勤める宋元玉と愛しあうようになり結婚式を挙げるまでにいたった。一方元玉は同僚で軽率な運動家であった千吾相チゴウサウと関係しており彼の子を宿していたうえに、彼の嫉妬もからみ思想事件に巻き込まれ挙式の当日に逮捕されてしまう。公判では無罪となるが、互いの間に生じた齟齬のため、朴斗栄は元玉を棄て東京に渡る。東京で苦学する斗栄は学生達の故国巡回講演に加わり「不滅の喊声」という題で講演を行う。これがきっかけとなり斗栄はかつて自分に思いを寄せていた金貞吉チンキョウの愛を確認、彼女の愛を心の支えにアメリカに渡り、ユタ州の鉱山で働きながら学費を稼ぎ医学生となる。しかし勉学の道が約束された斗栄には音信のとだえた故郷の母と貞吉のことが氣遣われてならず夏休みに一時帰国するが、そこで初めて母が元玉のもとに引きとられ暮していることを知る。心には貞吉を思いながらも現実には、和解もできず重苦しい思いを抱きつつ、一人淋しく母を養ってきた元玉を妻と認めざるをえぬのだった。

「聖母」…金尚喆は下宿の娘で同郷の徳仁に思いを寄せられるが、金尚喆はかえて同じ家に下宿しやはり同郷の安順慕に魅かれる。夏休みで帰郷した折、尚喆は順慕に心を打ち明け、順慕もこれを受け入れる。尚喆は下宿を他に移し順慕と自由に会えるようにするが、積極的な徳仁のため思うようにゆかず、逆に徳仁と関係してしまふ。それを知った安順慕は心の混乱により、尚喆の友で自分をモデルに卒業制作を続けてきた孤児の苦学生朴正賢チヨシヘンのもとに走り、結局彼と同棲するようになる。しかし極度の困窮と、そもそのいきさつからくるわだかまりは二人の間に感情的間隙を生じ、正賢は自分の後援者である女性と東京に渡ってしまふ。これを機に一人生きることを決心した順慕は孤独のうちに私生児を出産。その後私生児詰鎖チヨルセンを育てながら生活を続ける順慕には再三金尚喆から申し入れがある



が、青春の幸福を断念した友人としてのみ交際を続ける。成長した詰鎮は秘密の研究會が発覺して中国に逃亡する。残った順慕のそばには尚詰の娘玉慶がやってきて仕えることになる。

以上發表順に五篇の筋を紹介したが、李泰俊の長篇の一端を察することができるのではないかと思う。すなわち恋愛を軸としながら逆境の中で生きる男女の姿が描きだされている。以上の五篇のうち「法はそうだが」は短篇「五夢女」や「海」につながるものとみなされるが、残り四篇にはその後の長篇にあらわれる特色がほとんど出つくしているといつてもよいだろう。特に彼の長篇における切迫し緊張した雰囲気は「不滅の喊声」、「聖母」において頂点に達し、以後この緊張感薄らぎ再びあらわれることはない。その後の作品については簡単にその特色を指摘するにとどめる。

「花冠」…財産家の斐一鉉から言いよられる任東玉が最後までそれを拒否し苦学生の朴寅哲と結ばれるという筋。斐一鉉の喜劇じみた振舞と登場人物の不必要とおもわれるほどの長広舌が作品の中心をなす。

「三人姉妹」…宋貞梅・貞蘭・貞菊姉妹の性格の違いとそこから異なる生き方が描かれる。主人公を三姉妹として並列させた結果、これまでの作品における性格の不自然さが薄らぎ、李泰俊の作品の中では比較的こだわりを感じさせぬ作品となっている。

「思想の月夜」…松彬を主人公とする作者の自伝的小説。一家のロシア亡命から主人公の東京留学生活までを扱うが、後、単行本に収めるにあたっては玄海灘を渡る部分で打切られる。

「星は窓毎に」…会社社長の娘韓貞銀と苦学生魚河永との恋愛物語。悲恋に終った後それぞれ自分の生きる途を進んでゆく。

「幸福への白い手」…同じ女子専門学校出身の閔華玉、柳小春、車順南の三人が卒業後も互いに交友関係を保ちながらそれぞれ医学士夫人、小説家、事業家として進んでゆく様子を描く。

「青春茂盛」…女学校の教師だった元致源と彼をめぐる教え子高思心、崔得珠の恋愛物語。結末において元致源は手がけた金山で財産を得、二人の女性を伴侶として職業婦人のための社会事業を行うことになる。

以上の外に歴史小説が二篇あって、いずれもよく知られた人物を主人公としている。「黄眞伊」は有名な李朝の妓生黄眞伊を主人公として、彼女の逸話を編んで一篇としたもの。「王子好童」は高句麗大武神王の子として説話にあらわれる好童を主人公とし、彼をめぐる二人の女性蘇邑別と楽浪公主との交渉を描く。いずれの作品にも結末には虚無感を感じられる。

以上の紹介から李泰俊の長篇において恋愛または女性为中心的的位置を占めていることがみてとれると思うが、それ以外に、直接作品に接すれば社会問題に対する言及が随所に現われることに気付かれる。彼の長篇はこの二つを軸にして展開される。以下これらの問題が作者にとっていかなる意味を持っていたのかを探ってみることにしたい。

### 三

李泰俊の作品については発表当時においてもこれを憂鬱文学という範疇に入れ、その背景を当時の朝鮮および彼らの生活にみた例があり、最近においても彼の作品を植民地下の八日制（46）と貧困（47）と草昧（48）の中にあえぐ過渡期の社会問題を扱ったVとみなす例があるように短篇が必ずしも社会問題を扱ってないと言えぬのは事実である。（49）

短篇「或る日の明け方」、「不遇先生」、「故郷」、「桜は植えたが」、「田舎もの」などの作品に当時の社会の状況が反映されており、そこに作者の姿勢を読むことができるのは確かである。（48）しかし短篇においては作者の独特の文学的手法により屈折した形式や人物設定のため直接これらの問題は正面に出てこない。短篇においては社会問題は、いわば背景としての役割りを果たしているのである。この点において社会問題または民族意識を正面に出している短篇「失楽園物語」や「農民」は例外的な作品に属するだろう。

一方長篇においては主人公達の行動を通して随所に社会的関心が語られ、旧朝鮮の遺制や植民地下朝鮮の不合理さに対する批判が直接に表現されているようである。ここに作者の理想と情熱を感じとることができる。一旦言ってもよい。例えば「不滅の喊声」では、博愛主義を説きながらその実、利己的な学校当局、世に出ると理想を失う学生達、海外においてまで党派争いをやめぬ同胞、朝鮮人に対し民族的不信を抱く日本人などに批判の目が向けられ、逆に熱狂する聴衆の前で熱弁をふるう学生達、ハワイでみる檀君・李舜臣・大極旗に対する感動、アメリカの鉦山に働く朝鮮人労働者達の同胞愛などが積極的に肯定されている。「聖母」においても、社会に目を向けぬ朝鮮の親や家庭が批判され、朝鮮人が大切にせねばならぬ自分達の言葉や風俗のことが力説される。これらの傾向は「第二の運命」以降のどの作品についてもいえることであろう。

しかし長篇における社会的関心や民族意識はこうした断片的な記述よりも、そこに登場する主人公達の理想志向的な生き方に一層はっきりと現われているといえる。「第二の運命」においては民族の教育の砦ともいべき関東義塾の再建、「不滅の喊声」においては社会事業としての医学、「聖母」においては次の時代の担い手を育てることなどが主人公達の情熱の目標となる。特に後の作品になると一層具体的になり職業婦人のための更生施設再築園（「青春茂盛」）や、郊外の理想都市の建設（「星は窓毎に」）にまでいたるが、さらに全作品を通じて結婚に失敗した女性が自から生き甲斐をもって自立して行くという話が多いのも注目をひく（「第二の運命」、「不滅の喊声」、「聖母」、「三人姉妹」、「星は窓毎に」、「幸福への白い手」、「青春茂盛」）。しかもこの人生にいったんは敗れ自立の道を求め生きていく女性像を念頭におくと、これは単に女性の登場人物においてのみ見られるものではなく男性の登場人物においても全く同様であることに気づかされる。

実は李泰俊の長篇を通じて一貫しているのは逆境におかれた人物がいかにしてそれを克服して生きる道のみいだしていくかという点にあるように思われる。すでに述べた主人公達の理想志向にしても、孤独と逆境を基盤にして社会

に目覚めていくところから得られたものという傾向が強く、その基底にあるものは決して明るくはない。その理由としては、当時の社会状況も考えられようが、より多くは作者自身の失われた青春時代に対する口惜しさがこめられていることを挙げうるのではなからうか。この点を探るため作品に登場する人物について具体的に検討してみよう。

「第二の運命」の主人公はすでに述べたように孤児である。尹弼宰は少年時代を沈天淑の家を寄せることで、東京留学は朴子爵の援助によって、というように他人の助けにより生活を維持してきた。無一文の孤児である彼がいれば主人格にあたる家の娘天淑に思いを寄せられるという設定は妄想に近い。しかしこの妄想を支えたのは主人公の自尊心であった。この設定が「思想の月夜」における松彬と恩珠の関係と同じことからみても尹弼宰が作者李泰俊に極めて近く、弼宰の自尊心は孤児という境遇に加えて逆境を耐えぬくため作者が恃みにした唯一の支えであったと推測される。弼宰が触れうる限りでの世間は敵意に満ちている。失恋は友の策略と天淑の背信により、失職も同僚の嫉妬と策略により引きおこされる。失意と鬱憤のさ中であつた彼が廃校の危機に頻している関東義塾のことを知つたのは全くの偶然からであつた。<sup>(49)</sup>したがって主人公が消えかかる民族教育の灯を守る仕事に飛び込んでいったのは極めて個人的かつ偶然の動機によつてゐる。

他方沈天淑について言えば、不自由のない家庭に育ち裕福な結婚生活を営むはずの彼女は作者によつて復讐されるかのようにして破綻に直面する。そして彼女は自分の生きる道を弼宰の志を継ぐことに見いだすのである。天淑は「思想の月夜」の恩珠に重なり合うと同時に「星は窓毎に」の貞銀はその変型である。

「不滅の喊声」には二人の苦学生が登場する。表面にはでこぬ人物魚湧はかつて朝鮮全土に風雲巻き起つた時代の感化を受け友と故郷を出、鴨緑江を起えるが友は満州の土と化し一人戻ってくる。もし成功せずんばたとえ死すとも故郷にみじめな姿を晒さずと決心し苦学するが、結局学費滞納をなじられ反抗したという理由で退学処分を受ける。活路を求め上海に渡るつもりで強盗を計画するが未遂で逮捕される。その後、刑を終えて出てきた彼が救世軍に

加わり行進するうらぶれた姿が作品の最後に現われる。境遇からみて魚湧は作者の分身と考えられる。作者はもしかすると自分もそうなっていたかもしれない可能性に思いをはせて描いたのではなからうか。金に窮し非常手段に訴える話は「第二の運命」の南マリアや「青春茂盛」の崔得珠の場合にもみられる。

「不滅の喊声」の主人公朴斗栄の苦学歴も同様である。田舎で一人苦勞する母を想い彼はA立派な人物になって、きつと母のうけている今の恥辱をすすいでみせるVと決心する。朴斗栄の志ざすA立派な人物Vは彼の復讐心と愛情の葛藤を媒介にしてA真の朝鮮の知識青年Vに、A我々の理想を着々と進行させる強力な闘士Vという像を与えられる。逆境の中でひたすら自分を守りぬき前進する斗栄は作者の第二の分身であろう。ただしこの作品において愛情問題に対する決着は極めて不安定である。結局斗栄を元玉に譲り身を引く決心をした貞吉の次の言葉が将来を暗示する。

A「……」とにかく元玉に冷くなさらず彼女と結婚なさって。そしてすぐアメリカに戻って勉強を終えなさって。そうしてから、はじめの志の通り事業をなさって。事業をなさる方は大抵家庭に対して冷淡でしょ。また家庭が幸せな人は社会で大きく成功しないでしょ。そして私は……私が斗栄さんを想って一人暮してるからってかわいそうに思われることはないわ。昔友達の人一人みたいにしきりに思おうなんてなさらず、私も仕事に成功することだけを心で望んでくれませんか。だったら私満足なの……。それが私の幸せなの……。(50) V

ややもすると滑稽になりかねぬこのせりふをかううじて救っているのは話者貞吉の哀切さをおびたけなげさである。この貞吉は李泰俊の長篇の女性像の一つの典型であり、「久達の女像」の李仁愛や「玉子好童」の蘇邑別もこの型に属すといえよう。さらにこの女性像をおし進めたのが「聖母」の安順慕である。

兄弟の無い淋しさから兄の様に慕い、ついには恋人とした金尚詰に対し未練を残しつつも朴正賢のもとに走り、かつ棄てられた「聖母」の安順慕が真に現実を衝き当るのは私生児をかかえて自立してゆかねばならぬ自己を確認した

時からである。女手ひとつで子供を育てながら自分の過去を振り返る時、恋愛が若者の活発な進取性を拘束し、利己主義者として社会を、そして朝鮮を顧みなくさせるのに思いあたり、次代を担う子供達の教育の重大さを悟るのであった。

結婚生活に敗れ、自分の子供をかかえて社会のただ中で孤独に耐えながら一人生きる安順慕像は先の貞吉の妾型であるが、「三人姉妹」の貞梅や「幸福への白い手」の小春もこの型に属すだろう。さらに李泰俊が解放後に発表した「不死鳥」の主人公鄭如蘭がほとんど安順慕と重なるのを見ると、この女性像が作者にとって相当に愛着のあったものであることが窺い知れるのである。<sup>51)</sup>

李泰俊の長篇に登場する人物の原型はほぼ以上の三作「第二の運命」、「不滅の喊声」、「聖母」において尽されていると思われる。中心となる男性像は、孤児であるといなどを問わず孤独で自尊心の強い人間である。狷介ともいえるほど頑なであり他を容赦することを知らない。女性像は、優しさをそなえてはいるが自己の運命に耐え自分の道を切りひらいてゆく強さを獲得してゆく安順慕型か、生活に不自由なく育ち勝ち気ではあるが人生に失敗しそこから自分の生きる道を求めはじめる沈天淑型がその中心をなすといえよう。

長篇における理想志向、すなわち主人公達の社会意識や民族意識はこのような主人公が逆境や不運を克服して進む過程で目覚まされるのである。しかし彼らの昇華行為の契機となったものが果して挫折とみなしてよいものかは疑わしいといわざるをえぬ。少くとも男性の登場人物は挫折を知らぬのではないかと思われる。A復讐するのだ！金で！名譽で！Vと、「思想の月夜」の松杉は無邪気で屈託の無さげな女学生から屈辱を味わわれ、心に決心する。しかしひたすら復讐心に支えられた青春の結末はあまりにも虚しいものであったはずである。しかし屈辱が内に向う自己への問かけの契機となるはずのところ、逆に外部に向って自己の合理化を行うというのが李泰俊の作品の特色である。不合理なのは外の世界、すなわち自己の不遇を生み出したものであり、また古い朝鮮や植民地朝鮮とみなされた

のではなかるうか。内的な問いかけが深化されず、外的な理想指向によって合理化されるとき、作品は常識的な結論に到達せざるをえない。「聖母」の後に書かれた「花冠」、「三姉妹」、「青春茂盛」、「星は窓毎に」、「幸福への白い手」において主人公は世俗的に成功し安定してゆく。そこには、当時の時代に自己を合わせて世俗的安定を獲得した作者の姿を見ることが可能である。

もちろん、こうした理想指向と作品の軽さの背景を当時の時代的悪条件に求めることもできる。彼の長篇が同工異曲であり絶えず繰返しを行っているように見える背景には、一向に打開のきざしを見いだしえぬ現実の閉塞した状況が映しだされていることは確かであろう。しかし、だからといって作家としての李泰俊までもが自己省察を怠り、一作ごとに前進することを放棄してもよかったとは言えぬだろう。李泰俊が作品を通じて自己への問いかけを深められなかったこと、および挫折を受けとめるだけの能力を持たなかったことには彼の少年期における精神的障害の痕跡を認めることができそうである。

さらに、彼が繰返し作品に登場させた社会的関心は、ことさらそれをとりあげずとも当時の現実の中に生きていた読者にとっては言わずともがなの事柄であったはずである。ことさらこうした話題を繰返した裏には、読者である自民族との一体感を強調せねばならぬ作者の過度の自意識があったとはいえぬだろうか。

#### 四

李泰俊の作品が決して淡々とした心境の中から生みだされたものではなかったことは既に述べたことから明らかであろう。当時においても、白鉄は李泰俊の文学を鬱結の文学と称し、作品の背後に人現実に対するこらえ切れぬ鬱憤<sup>ウツヅク</sup>の存在を見ていた。内心の鬱憤と、既に紹介した穏やかさを漂わせた外観とは共に李泰俊の現実の姿である。彼自身は作品以外のところではめったに自分の内面の暗い部分を語らなかったが、例えば自分に加えられた不快な批評

に対して△読者は二三個月たてば忘れてしまふだろうが、当事者は一生たつても忘れず、機会があれば怨を晴らさずにはおられぬ▽のだと洩らしているのをみれば、彼の執念深さの一端を知ることができよう。(33) 彼自身もこの内面の歪みが生き方にも反映していたことを認めており、作家生活初期に次の様な証言をしている。

△のみならず私は逆を信ずる者である。「一」を数えてこそ「二」を数えるのが順序であるのは分っているが、「一」を数えることもできずに「二」を数え「三」を数えながら生きてきた。水が低きへ流れ下ることのみが真理ではない。だとすれば我々のような者の息の根はとつきの間にとまってしまつて……私に逆を歩んで、逆を信じてきた。ぶつかり耐えぬいてみれば流れ下る水も逆さに流れ上ることができるのである。

私の過去は流れ下ってきたものではないと感じる。私は逆らい流れ上ってきたので、逆らい上って行くのがまた私の将来であることを覚悟している。

勿論冒険である。未だ客気なのかもしれぬが、しかし経験は私に大方自信を与えてくれた。(34) ▽

逆境に生きてき、今なお逆境の中にあると感じている者の言葉であろう。が、またここに放浪体験を通じて体得された世に対する構えをみる事ができる。こうした構えが創作に反映したものととして、李泰俊の初期の短篇に目立つアイロニカルな手法を挙げる事ができる。彼の作品におけるアイロニカルな傾向は当時、崔載瑞によつても指摘されているが、(35) 特に李泰俊を△奇癖師▽と名付けその作風を特色づけたのは金東仁であった。すなわち金東仁は△世の中の奇型的一面をつかまえて小説化するのがこの作家の特色である。／＼しかし氏の作品は全てが全てあまりにも奇ヲコノム側へと流れている。「……」彼の作品全体がすべて一様に人生のあまりにも奇異な面を選びだしているため一種の奇癖師という印象を強く与える作家である▽と指摘している。(36) おそらく適切な評であつたのだろう、李泰俊も後にこれを是認している。(37) 結末の意外性、素材の風変わりさ、対象に対する皮肉な見方などは、この作家の作品を読む者には容易に感じとれるものである。



既に述べてきたことから、李泰俊の作品におけるこのアイロニーまたは奇癖の由来はほぼ理解されるのではないかと思われる。人生を逆に歩みアイロニカルに捉えざるをえなかった李泰俊にとって、人生のある断片を写しだす短篇にその傾向が反映したとしても不思議ではない。アイロニカルな手法は対象を現実の生々しさから切り離しその特質を露わにする効果をもつと同時に、作者の側からいえば自分の存在を作品の背後に韜晦させる効果を生みだす。彼の短篇のうち、アイロニーの抑えられた作品においては、往々憤懣やるかたなくいらだつ作者の心情が正面に露出するのは故なしとしない。例えば「故郷」、「失楽園物語」、「三月」がそうであろうし、「恩姬夫妻」の前半や「純情」にもその片鱗がみえる。これ以外の作品、特に初期のものはほとんど金東仁の言う「奇癖」的傾向の作品に属すといえよう。

ところで、これら「奇癖」的作品の中に愛情関係または女性を扱ったものが多いのは注目に値する。長篇の場合と合わせてこの素材が作者にとって何らかの特別な意味を持っていたことをうかがわせる。これに該当する作品として「晩餐」、「山月伊」、「恩姬夫妻」、「結婚」、「何事もないか」、「悲しき勝利者」、「コスモス物語」、「天使の憤怒」、「ある若き母」、「ある画題」、「よろずや婆さん」、「ねえや」、「愛慾の禁猟区」、「純情」等を挙げる事ができよう。見方によって出入りがあるにせよ、李泰俊にとって異性はある特別なわだかまりを持った存在であったことがいえるのではなからうか。すなわち、何らかの意味での女性コンプレックスの存在である。

「恩姬夫妻」の恩姬、「悲しき勝利者」のメダは「第二の運命」の沈天淑型に属し、「純情」の慶玉キョンオクと合わせて語り手「私」からは自分を裏切った女性として描かれている。また「結婚」、「コスモス物語」では安楽な結婚生活を営むことに対して疑問をいだきはじめる女性が扱われていて、見方によっては同じ系列に属す作品といえるだろう。さらに「愛慾の禁猟区」の南順ナムスンをめぐるエピソードは「三人姉妹」の貞梅のそれとほぼ同一であるなど、これら短篇と長篇の間に密接な関係の存在することが認められるのである。

他方△私Ⅴとして作品に登場する男性の語り手は、作品が△奇癖Ⅴ的であるなしに拘らず全く変らず、長篇の主人公と同じ尹弼宰型である。△私Ⅴの相手に対する態度は頑なであり容赦することを知らない。「恩姫夫妻」において△私Ⅴの愛人は、故郷の友に偶然会ったため、訪ねてくると約束した日に約束を果せなかった。△私Ⅴはこのたった一度の事から相手を一切許さず、以後送られてくる手紙も差し戻してしまふ。このため結局相手は他の男と結婚してしまふ。「悲しき勝利者」におけるメダは△私Ⅴと一年程一緒に教員生活をした女性であるが、△私Ⅴが東京に画学生として留学している間に音信がとだえ、その間に裕福な男のもとに嫁いでしまふ。△私Ⅴは彼らの家から注文を受けた絵を描く間に機会をえて、自分を裏切ったメダに唾棄を飲ませ、眠らせたまま、寝台車に乗せあてもなく行くというのが結末である。作者の復讐心が屈折した形で表われているとみられる。

「純情」は△私Ⅴの社会に対する鬱憤が女性に対するものと重ね合わされた作品である。事あるごとに不平をもらし円満さを欠く△私Ⅴはある日会社の取締役から呼びだされ注意を受けるが、却って相手を怒らせ会社をやめざるをえなくなる。その道で慶玉キョウキョクのもとに行き、経済的な理由で結婚を渋っている慶玉に金ができた作り話して喜ばせる。そうしておいて、後に手紙で、おまえの心の中確かめたりといわんばかりに絶縁を宣告するという話である。

これらの作品から李泰俊の作品における沈天淑型の女性のもつ意味が浮び上ってくるだろう。それは逆境の中で鬱憤を押しきれぬ主人公の復讐心を転嫁する対象としての女性である。さらにその復讐心は二重の役割りを担っている。一つは裕福な者に対する貧しい者の復讐心であるが、もう一つは、孤独からくる甘えの欲求を満せぬことからくるいらだちの転換されたものとしての復讐心である。

それでは「聖母」の安順慕像はどこに由来するのだろうか。これに関して暗示的な作品は「妹」および「影」である。この二つの短篇は初期の李泰俊の作品としては異色な雰囲気漂わせている。それは作品のもつ生々しさ、あるいは切実さである。

「妹」の語り手△私▽は東京で学ぶ画学生である。壁の隙間を通して窺われる隣家の若夫婦の生活に毎日悩まされて△私▽は心を静めるため夜、近くの雑司ヶ谷墓地へ△悔辱的な▽散歩をするのだが、ある夜、興奮を静め切れぬまま、通りがかった女性を襲う。相手の逆いもせず柔順な様子を奇異に思って言葉をかけると、相手も自分と同様孤独で苦しんでいる人間であることを知る。立去る間際に彼女は△妾もこれから淋しい人々の味方になりますわ▽（原文日本語）という言葉を残してゆく。△私▽はあたかも再会のあてもなく別れた妹のように彼女の面影がいとおしくなるという話。

また「影」は貧しく△哀しい▽境遇にあるが故に互いに心を魅かれ愛し合うようになった△私▽と妓生小蓮の話である。相手に私生児の娘がいることを知らずふと洩らした△私▽の言葉がもとで小蓮は絶望から娘を毒殺しようとして捕まる。△私▽は相手が真実を話さなかった事に対する怨み、共犯になるかもしれない怖れ、心のやましきから悩むが、結局全てを知りつくした後で彼女に対する感情が冷めてしまっていた△私▽は、た易く心を整理してしまう。その後結婚した△私▽が実家に帰る妻を見送りに駅に行くと、妻の坐る席の前に娘を連れ疲れて寝込んでいる小蓮の姿を発見するが、△私▽はそのまま列車から降りてしまうという結末である。長篇「花冠」の朴寅哲のエピソードはほぼ同様の筋であるが、ここでは妓生は無実の罪で捕えられ、寅哲は心のやましきから証人として出頭することになっている。

いずれの作品も李泰俊の他の作品との関連を考慮する時、色々と問題になりうる点を含んでいると思われるが、ここではさしあたってこの二作から、貧しく孤独な語り手の、女性に対する思慕と罪の意識を抽出するにとどめておくことにする。

この女性に対する思慕が女性一般ではなく肉身、特に母親に対する憧憬と関連していることは十分に推測されることである。少年期の孤児体験の中で受けた精神的傷痕を未だ癒しきれず、また心の空白を残したまま埋めることもで

きずにいる主人公の内面の要求の表現である。こうした心の空白を埋めてくれる思慕の対象が妹と重なり合うのはさほど奇異ではなからう。さらに女性に対する罪の意識であるが、はたして作者自身の過去に「影」や「花冠」にあらわれる様な事実があつたかどうかの詮索はここでは一先ずおくことにする。要は、私生児を抱えて一人生きねばならぬ女性という形で現われる女性像に作者が終始わだかまりをもっていたということであろうし、作者の罪の意識がこうした女性の形をとって要約されていたことであろう。作者がこうした心のやましさをから逃れることも克服することもできずにいたとすれば、これは作者が憧憬し求めていた母親から結局は独立自立できなかったことを意味することになる。その結果は円満な愛情関係さらには人間関係の不在とならざるをえない。<sup>(58)</sup>

愛情表現が円滑に現われない例としては、登場人物達が相手に対して愛情を感じる際において、まず相手の愛人に対する嫉妬を媒介としていわば誘発される形式の多いことにもあらわれている。彼らは自分の愛を自発的に確認するのではなく他を媒介として確認する(例えば「第二の運命」の順九、「不滅の喊声」の天吾相、「聖母」の尚詰や順慕など)。また自分の愛に対する確認の自信のなさは、恋愛においても消極的で優柔不断とならざるをえない。特に男性の主人公達においてこの傾向は著しく、彼等は相手が積極的に働きかけてくることを望みながらも自分からはそれに応じるだけの積極性をみせない。したがって李泰俊の作品においてはいきおい女性は活発で、男性との対比が著しい(例えば「第二の運命」における尹弼宰と南マリヤ、「不滅の喊声」における朴斗栄と宋元玉、「花冠」における朴寅哲と任東玉、「青春茂盛」における元致源と高恩心および崔得珠、「星は窓毎に」における魚河永と韓貞銀など)。

このようにしてみてみると李泰俊の作品に登場する女性は一樣に男性主人公達の甘えの対象という要素を帯びていることに気づかされるのではないだろうか。心の中には自分の孤独を癒してくれることを望みながらそれを表現できず、ただ相手の側からそれを察してくれることを期待する主人公達は作者の分身であつたかもしれない。この期待に旨く応じてくれぬ時、相手は自分を裏切つた女性とされるのであろう。ここに現われる自己合理化の傾向は、あたか

も社会に対する復讐心により自己を合理化する傾向にみあっているかの様に思われる。<sup>(69)</sup>

## 五

以上、李泰俊の作品の中長篇を中心にしてそこにあらわれる社会的理想志向と恋愛の問題を取扱ってきた。前者は当時の歴史的現実を背景にしており、後者は普遍的な主題であるが、いずれも当時の作家にとって読者を獲得するためには恰好のものであったと思われる。こうした一般的な前提を差引いたところにあらわれるのが李泰俊に独自の課題であったはずである。読者に訴え易い形式を選びながら、その中に作者自身の抱えていた課題をいかにに繰込んでいったかが問題となるわけである。

既に見たことから窺われるように、彼の作品には随所に作者の孤児体験が反映していると思われる。社会的関心も恋愛もその元をたどれば同じ源から発しているものと推察される。彼の作品には、寄るべのない孤児という境遇におかれて、自分の置かれた世界の中でいかにして自己の占める場所をみいだせるか、自己をいかにしてこの世に位置づけることができるか、懸命の合理化を行ってきた作者の姿を見ることができるようである。長篇に現われる限りにおいては作者の分身とみなされる主人公達の性格は概して暗く不安定である。この点に関しては、当時洪曉民が「不滅の喊声」の主人公達を「全て健康ではない性格の所有者だと言わざるをえぬのである」と指摘する通りである。<sup>(70)</sup>そしてこの暗さが時代の暗さとよく符合するにもかかわらず、実は作者自身の個人的なものであった点は既に述べた通りである。金起林をして「老熟した」と言わしめた外観のかけにあるこの暗さは李泰俊の精神的傷痕と結びつけられるだろう。はたして彼はこの傷痕の克服を行えたのかどうか、以下この点について若干ふれてみる。

既に述べたように李泰俊の長篇において最も緊張感のある作品は「不滅の喊声」および「聖母」である。特に前者においてその傾向が著しい。あたかもこれに見合うかの様にしてこの作品の書かれた前後で短篇の傾向も様相を変え

ている。初期の短篇に特徴的なアイロニーを帯びた作品から「孫巨富」、「からす」、「福徳房」のような彼の代表作に移ると同時に「長雨」、「浪江冷」、「阿蓮」、「兎物語」、「無縁」、「夕陽」、「狩り」など私小説的手法の作品が書かれたのもここを境にしてである。李泰俊自身は「孫巨富」、「愚菴老人」、「ねえや」などを白鉄の「人間探求論」にヒントをえて書いたと言っているが、彼自身にすでにこの準備ができていたと見るべきであろう。

ところでこの「不滅の喊声」においてみられる緊張感は、互いに自分の最も辛く苦しい時に裏切られたと感じ怨みを抱きながらも共に暮さねばならぬ男女を描いているところに表われている。Aあなたは裏切り者だわ。自分の愛している者が、他の時とは違って一番悲惨な境地に陥っている時に見棄てた男なんだわ。どんなにあなたは残忍な人なんだろうか？V八人の一番悲惨な境地で見棄てたのは、私は、あなただと思っています。「……」人が飢えていようが、下宿を追いだされようが、公園のベンチで寝ようが、あなたは人の安否も知らんふりして、訪ねていっても、まともに会ってくれもしなかったのです。「……」私も今やあなたに冷淡な男です。V一方は子供を抱え自活しながら耐えている女性、他方はアメリカの鉱山で働きながら学費を稼いでいる主人公が互いにやりとりする手紙の一部である。特にこの女性元玉が沈天淑のように恵まれた家庭の女性とはいえぬことが「第二の運命」のような結末のつけ方を不可能にしている。もし李泰俊がこの互いに衝突し合う自我の主題を一層深めることができたとするれば、以後の彼の文学および生き方は相当に異なったものとなっていたと思われる。

以後李泰俊の採った方法はあらかじめ心の痛手を和げらておく方法であった。彼は一旦到達した主題を發展させることなく、同じ題材を繰返すことにより次第に作品の深みを減少させると同時に、その代償として社会的事業を登場させる。愛情の葛藤においても「王子好童」や「青春茂盛」にいたっては二人の女性の愛を摩擦なく同時に勝ち得るという試みがなされるにいたる。こうした作品の類型化は沈天淑型や安順慕型の女性像の類型化をも同時にもたらし、葛藤を希薄にする。天淑型の女性であるはずである高恩心（「青春茂盛」）や恩珠（「思想の月夜」）には何らの破

綻も起らぬし、韓貞銀（「星は窓毎に」）における悲恋にもさほど深刻さは見られない。また安順慕型の女性宋貞梅（「三人姉妹」）や柳小春（「幸福への白い手」）はもはや孤独ではなくそれぞれ姉妹や友人の助けを借りて生きて行くことができる。作家として世俗的地位を獲得した李泰俊にとって復讐の対象としての沈天淑型の女性もはや切実さを持ちえなかったのは納得がいく。しかし作者にとって罪の意識を併った安順慕型の女性に関しては、外的な成功如何に拘らず依然として切実な自己確認の課題として追求されねばならなかったはずと考えられる。ところが先に述べたようにこの女性像も同様にして作品の中で合理化され処理されてしまったことを考えると、結局李泰俊においては母からの自立は成し遂げられぬままになってしまったものとみなさざるを得ない。これに関しては、李泰俊が解放後にまず執筆した長篇「不死鳥」が「聖母」の焼き直しに過ぎなかったことは暗示的である。このことから推測されることは、李泰俊にとって孤児体験から受けた精神的傷痕などは問題にもされえなかったのではないかという事であり、彼の長篇の主人公達と同様に彼自身も挫折を感じるに足る感受性を喪失しており、したがってその克服も課題となりえなかつただろうという事である。もし李泰俊について、孤児体験からくる精神的傷痕が言われうるなら、この感受性の麻痺を指すべきだろうと思われる。

「不滅の喊声」以降に書かれた短篇において感じられる作者と対象との距離感も以上の点と関連させて考慮さるべきではないかと思われる。さらに彼の自己合理化がどのようにして進行し完成していったかを窺う材料として、民族意識が正面に現われている短篇「失楽園物語」と「農民」を取り上げてみよう。

「失楽園物語」は「第二の運命」の関東義塾の話と同じく、田舎の新明義塾に働きながら村人の生活改善などにも献身的に努力する八私ⅴが、結局は日本人官憲の妨害により村を立ち去らざるをえなくなる顛末を描いた作品である。作品中に二度八私ⅴが官憲に呼び出されやりとりする場面がでてくるが、そこで相手の言うせりふに次のようなものがある。八ようし、お前が何の役員でもなく普通の会員の資格を持っているだけというのからしてお前の陰謀だ

というんだ。操縦はお前がやり責任は善良な田舎の青年に押しつけるってんだろ……。V/A人を教える者は卑怯じゃだめだ。お前が頭をくりくり刈ってまでして俺に対する態度がどんなに卑怯であるか？V前者は責任を追求されたA私Vが言を左右して自分は責任者でないの知らぬと答えた時、相手の言う言葉の一部であり、後者は再度出頭する際、事を荒だてぬため頭を丸刈りにして行った態度を指して言われている。もちろんこれらの言葉は日本人官憲の卑劣な中傷として書かれてはいるが、どことなくA私Vの側にあるやましさの感じがつきまどっている様に感じられる。すなわち、ここでのA私Vは相手の官憲に心の中の弱みを見透されている印象を与えている。作者はこの小説や「第二の運命」にあるような事業に直接携わったことにはないはずである。とすれば、ここに表われたやましさは、たとえ小説の中とはいえ本来自分ものではなかった積極的な民族意識を持った人物を、A私Vとして登場させたことからくる作者のためらいに由来するものと考えられはせぬだろうか。

一方、後期の短篇「農民」は朝鮮人の満州開拓を扱った作品である。金東仁の「赭い山」や「安壽吉」の「稲」のように、この題材をとり上げること自体、民族意識を表すこととされるのであるから、李泰俊も充分このことを意識して書いたものと思われる。物語りはいわゆる「萬宝山事件」を扱っており、水田を作る開拓民と中国人との衝突の場面が最後に登場し、主人公昌権チャンゴンは脚を撃たれ、一人の老人が死亡する。開拓民の苦難の結晶である灌漑用水を流れてくる老人の死体は作品の最後の高まりを形成するのに欠かせない要素となっている。ところで作者はこの小説の素材を執筆前年に行った満州旅行の際に取材している<sup>(64)</sup>。ところが彼の取材した話では死傷者はなかったはずであり、また実際の事件においても同様であったはずである。文学作品であるかぎり虚構は許されてもよい。しかしこの作品における作者の脚色が民族意識を背景としていることを考慮するとき、これは意識的になされたはずである。「失楽園物語」と比較すれば、この作品における作者の姿勢にはどこにもためらいは感じられぬとみてよい。李泰俊はここにおいて民族主義作家として完成を遂げている。



それと同時に彼の自己合理化の作業も完成したものとみなしてよいだろう。結局、挫折を内化する作業を行い得ず、民族主義作家として自己を合理化してしまった李泰俊のこの傾向は解放後にもそのまま引き継がれてしまった様である。李泰俊の作品には、一種の観念的興奮からくるV/A合理主義本質が横たわってV/おり、これは解放後にも変っていないと喝破したのは金東里であったが、日本の植民地支配という民族意識発揚の口実を失った李泰俊が「解放前後」や「農土」において自己弁護という形で主人公の合理づけを行っているのも必然の帰結ではないかと思われる。

〔註〕以下の註における資料は(33)、(35)を除き原文は全て朝鮮語である。

- (1) 少年時代の記述は自伝的小説「思想の月夜」が詳しいが、エピソードに後の時期のものがみられること、および資料の統一を図るためここでは彼の隨筆に断片的に散見する記述および自筆の年譜を利用した。この資料と「思想の月夜」との違いについては註(35)の文献参照。
- (2) 李泰俊『第二の運命』(漢城図書株式会社、一九三七・六発行) 附載「著者略伝」。
- (3) 「小さき旅籠屋の走り使い——小説家李泰俊氏のアルバムから」(『新家庭』一九三二・四、150—151)。
- (4) 註2に同じ。
- (5) 李泰俊「旅情の一日①」(『朝鮮中央日報』一九三四・十二・十三)。
- (6) 註5に同じ。
- (7) 李泰俊「南行列車」(『新東亞』一九三二・十二、117—118)。
- (8) 李泰俊「私には何故母がおらぬのか」(『新家庭』一九三二・五、46—48)。
- (9) 李泰俊「孤児の追憶——おぼろげな時分」(『朝光』一九三六・六、290—292)。
- (10) 註8に同じ。
- (11) 李泰俊「私の孤児時代——追憶三」(『白雲』一九三二・三、44—46) および「山の追憶」(『新生』一九三二・六、12—13)。

- (12) 註2に同じ。
- (13) 註8に同じ。
- (14) 註3に同じ。
- (15) 李泰俊「徒歩三千里」(『学生』一九二八・七、88—89)および「私の孤児時代」(既出)。
- (16) 「小さき旅籠屋の走り使い」および「私の孤児時代」(既出)。
- (17) 註2に同じ。
- (18) 李泰俊「追憶(中学時代)」(『学生』一九二九・四、92—94)。
- (19) へ特告。李泰俊氏の小説「五夢女」は当選せるも事情により発表できぬにつき作者の現住所を通知されたし(『朝鮮文壇』一九二五・七、213)。
- (20) 「朝鮮文壇合評会第六回、七月創作小説総評」(『朝鮮文壇』一九二五・九、121)参照。
- (21) 註2に同じ。
- (22) 李泰俊「稱香の思い出若干」(『現代評論』一九二七・八、24—29)。
- (23) 註2に同じ。
- (24) 李泰俊「ミス・スプリング」(『中央』一九二六・四、150—151)。
- (25) 註2に同じ。
- (26) 『慧星』一九三二・三、p. 91「風聞帖」による。
- (27) 李泰俊「悪伴侶」(『新民』一九三〇・七、119—120)および『第一線』一九三二・十二、p. 67「風聞帖」。
- (28) 李泰俊「小犬」(『新家庭』一九三四・五、10—11)。
- (29) 金起林「スタイリスト李泰俊氏を論ず②」(『朝鮮日報』一九三三・六・二六)。
- (30) 「漫文漫画・文人漫画観像録」(『新東亜』一九三四・三、143)。
- (31) 白鉄「朝鮮新文学思潮史・現代篇」(白楊堂、一九七四・七) p. 21の参照。
- (32) 安懷南「文芸時評——最近創作概評⑥」(『朝鮮日報』一九三三・五・三〇)および安懷南「現役作家達の技倆③」(『朝鮮日報』一九三六・九・五)。
- (33) 李泰俊『福徳房』(モダン日本社、一九四一・八)に附された張赫宙の跋文中の言葉。

- (34) 金允植『孤児意識と国学』(『韓除近代文学思想批判』一志社、一九七八・三、31—53)。
- (35) 長埜吉「李泰俊」(『朝鮮学報』第九十二輯、109—116)はこの点に関して詳細な報告を含む。
- (36) 筆者が接しえた作品の篇数は次の通りである。  
幼年物9・掌篇6・中短篇46・長篇13・戯曲2。ただし「氷点下の憂鬱」および「道で捨った鉛筆」は随筆とみなし除外してある。
- (37) イム・ヒョングテク「尚虚、李泰俊論(其一)」(『駱山語文学』第一号、一九六三・十一、7—16)。
- (38) 註29の文献中にすでにこの言葉がみえることから察すると、これは作品「久遠の女像」の題名により一般化し定着したと思われる。
- (39) 李泰俊「短篇と掌篇」(『無序録』一九四一・六、91—97)および「朝鮮の小説」(同著105—112)。
- (40) 「長篇作家訪問記(三)理想を語る李泰俊氏」(『三千里』一九三九・一、222—227)。
- (41) 李泰俊「短篇と掌篇」(既出)。
- (42) 例えば「作品愛」(『博文』一九三八・十、2—4)。
- (43) 註41に同じ。また註39・40の文献にも同様の記述がみられる。
- (44) 植民地時代に発表された長篇小説は次の通りである。  
「久遠の女性」(『新女性』一九三一・一—一九三二・八、18回)『単行本』(太陽社、一九三七)。  
「法はそのだが」(『新女性』一九三三・三—三三・四・三、11回)。  
「第二の運命」(『朝鮮中央日報』一九三三・八・二五—一九三四・三・二三)『単行本』(前掲注2)。  
「不滅の喊声」(『朝鮮中央日報』一九三四・五・十五—一九三四・三・三六、262回)。  
「聖母」(『朝鮮中央日報』一九三五・五・二五—一九三六・一・十九、211回)。  
「花冠」(『朝鮮日報』一九三七・七・二九—一九三九・二・二二)『単行本』(三文社、一九三八・九)。  
「三姉妹」(『東亜日報』一九三九・二・四—一七・七、133回)『単行本』(文章社、一九三九・十一)。  
「青春茂盛」(『朝鮮日報』一九四〇・三・十二—一八・十一、127回中断)『単行本』(博文書館、一九四〇・十二)。  
「思想の月夜」(『毎日新報』一九四一・三・四—七・五、97回)『単行本』(乙西文化社、一九四六・十二)。ただし単行本では最後の章「東京の月夜」が削除され、その前の章「玄海灘」に手を加えて終章としている。

- 「幸福の白い手」(『朝光』一九四二・一—一九四三・一、12回) 単行本『三人友達』(南昌書店、一九四三)。  
「星は窓毎に」(『新時代』一九四二・一—一九四三・六、18回) 単行本『博文書館、一九四五・三』。  
その他に歴史小説が二篇あり、次の通りである。
- (45) 「黄真伊」(『朝鮮中央日報』一九三六、連載中断) 『単行本』(東光堂書店、一九四六・八)。  
「王子好童」(掲載紙不明。『朝鮮日報』一九三八年連載か?) 『単行本』(南昌書店、一九四三・十一)。  
以下ルビを振った人名は、原文はハングルのみで、これに該当する漢字を便宜的に当てたものである。
- (46) 趙容万「文芸時評——文学への情熱その他」(『朝鮮日報』一九三三・一・二四—三〇、6回)。  
(47) 林焚沢「過渡期的風景と形象化された土着文化——尚虚論(其2)」(『駱山語文学』第三号、一九六四・十、19—30)。  
(48) ここで作品の前後関係を知るための参考として、註36に該当する作品中、掌篇・中短篇を年度別に列挙しておく。以下掲載誌は省略した。
- 一九二五年「五夢女」／一九二九年「幸福」・「或る日の明け方」・「晚餐(原題・モダンガールの晩餐)」・「影」・  
「妹」／一九三〇年「山月伊(原題・妓生山月伊)」・「恩姫夫妻」／一九三二年「結婚(原題・結婚の悪魔性)」・「故郷」・「何事もないか(原題・火は出てないか、泥棒はいないか、何事もないか)」／一九三三年「コスモス物語」・「悲しき勝利者」・「不遇先生」・「春」・「天使の憤怒」・「失楽園物語」・「怪しい話」／一九三三年「桜は植えたが」・  
「なまず」・「アダムの後裔」・「馬夫と教授」・「或る画題(原題・鼻が桃のように赤い女)」・「或る若き母」・「月夜」／一九三四年「よろずや婆さん」・「田舎もの」・「点景」・「愚菴老人(原題・暗闇)」／一九三五年「ねえや」・  
「三月」・「愛慾の禁猟区」・「孫巨富」／一九三六年「からす」・「純情」・「海」・「長雨」・「鐵路」／一九三七年「福徳房」・「コスモス咲く庭園」・「沙漠の花園」／一九三八年「浪江冷」／一九三九年「寧越令監」・「阿蓮」・「農民」／一九四〇年「夜道」／一九四一年「兎物語」・「裏部屋伯母さん」／一九四二年「狩り」・「夕陽」・「無縁」／一九四三年「石橋」。
- (49) 尹弼宰が運営難に陥っている関東義塾のことを知ったのは、マリアが買ってとどけてくれたダリアの包み紙であった新聞紙をなげなく見てであった。単行本『第二の運命』p. 501。
- (50) 「不滅の喊声」第25回。
- (51) 李泰俊「不死鳥」(『現代日報』一九四六・三・二八—七・十九、90回中断)。この愛着の意味については後述する。

- (52) 白鉄「鬱結の文学」(『朝鮮日報』一九三七・三)、『白鉄全集②』(新丘文化社、一九六八・十一) 307—214に収録。
- (53) 「李泰俊氏家庭訪問記」(『朝鮮文壇』一九三六・七、298—299)。
- (54) 李泰俊「悪伴侶」(既出)
- (55) 崔載瑞「短篇作家としての李泰俊」(『文学と知性』人文社、一九三八・六、175—180)。
- (56) 金東仁「小説界の動向——一九三三年文壇総決算」(『毎日申報』一九三三・十二・二二—二七)、『金東仁全集⑥』(三中堂、一九七六・九) 169—174に収録。
- (57) 李泰俊(談)「作家と批評家の弁」(『朝光』一九三七・九、88—90)。
- (58) 植民地時代の詩文学に表われた女性コンプレックスとして、漠然とした孤児意識、即ち失われた母性に向う幼児意識、等を論じたものに、金允植「韓国詩の女性的偏向」(『近代韓国文学研究』一志社、一九七三・二、447—473)があるが、本稿ではこの論文との関連性を述べる余裕がなかった。
- (59) 自分の愛人に対して「愛人が同士と一体だったら」(「久遠の女像」)とか「その前夜」のエレーナになってくれ、(「不滅の喊声」)とか要求する主人公の姿は、愛という個の問題を民族意識という公の問題に置き換えようという意識を表現しているともみなしうる。
- (60) 洪曉民「文芸的生産と生産的文芸」(『朝鮮文壇』一九三五・五、126—129)。
- (61) 白鉄「人間描写時代」(『朝鮮日報』一九三三・八・二九—九・一、4回)および「人間探求の途程」(『東亜日報』一九三四・五・二四—?)。いずれも『白鉄全集②』に収録。ただし、李泰俊は白鉄の文の内容にはなく表題にヒントを得たと述べている。「作家と批評家の弁」(既出)参照。
- (62) 「不滅の喊声」25および26回。
- (63) 「失楽園物語」(『東方評論』一九三三・七、195—200)。「農民」(『文章』第七輯、一九三九・七、217—229)。
- (64) 李泰俊「移民部落見聞記」(『朝鮮日報』一九三八・四・八一—二、11回)。「無序録」(既出)に「満州紀行」と題して収録。
- (65) へしかしその時、彼等の銃弾が命中した者は一人も無いという。遠くから威嚇せんと弾丸が空中にそれるように撃つばかりだったせいか、一人も傷ついた者は無く「……」万一その土民達が殺生を好んだのであったなら、その土民達の棍棒によってでも犠牲者が無くてはすまされなかつたはずだ。√(「移民部落見聞記」第11回)。

- (66) 例えばハ(一九三一年)七月一日・二日両日間の韓中農民の衝突と両者の抗議文書の往来はそれほど大きな問題ではなかつた。V(朴永錫『万宝山事件研究』亜細亜文化社、一九七八・十、p.95)。
- (67) 金東里「文壇一年の概観——一九四六年度の評論・詩・小説について」(『文学と人間』白民文化社、一九四八・十、p.206)。
- (68) 李泰俊「解放前後」(『文学』創刊号、一九四八・一、p.34)。「農土」(三星文化社、一九四八・八)。